

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02104

研究課題名(和文) 日系高齢マイノリティの「その人らしい暮らし」を支援するための基礎研究

研究課題名(英文) A Basic Research on Person Centered Care for the Elderly Nikkei Minorities

研究代表者

河本 尚枝 (Kawamoto, Naoe)

広島大学・人間社会科学研究科(総)・准教授

研究者番号：50403499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本、台湾、ハワイでの調査から日本人高齢移民の多様なライフコースを明らかにし、採用したストラテジー、生きがいや不安を聞き取った。言語から生じる諸問題に不安を抱え、帰国を考えるリターン・マイグレーションに言及した人がいた一方、子ども世代の協力やテクノロジーを駆使して問題解決する人も見られた。基礎研究として一定の成果を上げられたが、日本人高齢移民が採用するストラテジー、リターン・マイグレーションについての研究は限られるため今後はこれらも含めて研究課題としたい。本研究期間を通じて発表した業績は、書籍1(監修、共著)、論文・研究ノート3、口頭発表6(うち国際学1)、講演12、ワークショップ3である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際化に伴い、日本人が海外に居住することが増加してきた。移民研究においては若年期の移民の教育問題、就労問題、生活上の困難は研究されてきたが高齢期の意味がどのような生活をし、どのような課題を抱えているかはこれまで明らかにしてこなかった。本研究は、国境を越えて暮らす日本人高齢者がどのようなライフコースを描き、どのような生活をしているかを明らかにするという点で、社会学、移民研究の点において大きな意義を持つ。また、この研究から得られる知見を日本の介護福祉の現場に還元することで国際化する日本で増加する、海外にルーツを持つ高齢者をどのように支援していくかという点で貢献が見込まれる。

研究成果の概要(英文)：Surveys conducted in Japan, Taiwan, and Hawaii revealed the diverse life courses of elderly Japanese immigrants, and the strategies adopted, meaning in life, and anxiety were obtained. Some mentioned return migration, or returning to Japan because they were worried about problems arising from language. In contrast, others get help from their children or use technology to resolve their issues. Although some results have been achieved as basic research, there is limited research on the strategies and return migration adopted by elderly Japanese immigrants, so we would like to include these as future research subjects. The results presented throughout this study were one book (supervised and co-authored), three papers and research notes, six oral presentations (including one international conference), twelve lectures, and three workshops.

研究分野：社会学、福祉学

キーワード：高齢者 移民 福祉 介護 その人らしい暮らし

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展とともに越境する人々は増加を続けている。日本も多くの入国者を海外から受け入れ、同時に多くの日本人が海外に移り住んでいる。これまで移民研究は労働問題、家族再結合、言語・文化の獲得および教育、統合政策など多方面から進められてきたが、その対象は就学・就労期、子育て期が中心である。生まれ育った言語、文化から離れた人々がどのように高齢期を迎え、どのように暮らしているかに焦点を当てた研究は少ない。一方、平均寿命の伸長に従って高齢期は長くなり、老年学や老齢医学では長くなった高齢期をいかに過ごすか、社会福祉学では高齢期でもその人らしい暮らしをするにはどのように支援するかという生活の質向上に焦点を当てた研究が増加している。

本研究は、老年学、老齢医学、社会福祉学で取り組まれてきた高齢期に焦点を当てた研究を社会学、移民研究の分野で実施するものである。類似の研究としては、日本におけるコリアン高齢者の研究がある。そこでは彼らの生活実態を明らかにし、課題解決に取り組もうとする研究が行われている。しかし、日本にルーツを持つ人々を対象にして、海外から日本に来た人々、日本から海外に出て行った人々の比較研究は行われていない。そこで、本研究では社会学、移民研究の分野で注目されてこなかった移民の高齢期に着目し、マイノリティがその人らしく暮らすことをテーマとする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、越境して異文化で高齢期を迎えた、日本にルーツを持つ人々がその人らしく暮らすにはどのような課題があり、どのような生活支援が必要かを明らかにすることである。具体的には、(1)日本にルーツを持ちながら生育環境と異なる言語・文化の地域で暮らす人々を調査対象とし、母語・母国から離れた環境で暮らす人々がどのような高齢期を迎え、どのような問題を抱えているかアクションリサーチを交えて調査研究を行い、(2)そこから得た課題の解決に向けて実践的支援の提言を行う。本研究は、研究の蓄積という点で学術的に貢献するだけでなく、国際化した日本において増加する海外にルーツを持つ高齢者をどのように支援していくかという点で介護・福祉従事者に新たな知見を提供することが見込まれる。

3. 研究の方法

日本にルーツを持ち母語・母国から離れた環境で暮らす人々を対象に、どのような高齢期を迎えており、どのような問題を抱えているかについてアクションリサーチとライフヒストリー・インタビューを交えて調査研究を行う。具体的な調査対象グループは中国帰国者、台湾居住者、韓国居住者および米国（ハワイ州オアフ島、ハワイ島）居住者である。

中国帰国者については日本政府の事業委託を受けて永住帰国した中国帰国者を支援する「支援交流センター」および各地で活動する支援者から調査協力者の紹介を紹介してもらった。台湾居住者及び米国居住者は日本人コミュニティのキーパーソンにアクセスし、キーパーソンからの紹介およびスノーボールサンプリングにより調査協力者を得た。なお、韓国居住者については新型コロナウイルス感染症の感染拡大、それに続く自粛等のため調査を行うことができなかった。

4. 研究成果

- (1) 牧田(2020)は、在留外国人統計のデータに基づき、過去10年間で高齢期人口が増えている国籍グループが存在することを提示し、高齢期を迎えたあるいは迎えつつある在留外国人の国籍グループごとに来日の経緯とともに整理した。この研究では、文献レビューからこれまでの研究でケアに関わる論文では外国人介護者、オールドカマー高齢者に関するものが多いこと、高齢中国帰国者については介護施設へのアクセスとケア資源が乏しい状態が明らかにされていることを指摘したのち、多文化の背景を持つ高齢者の移住背景や日本での生活と課題そして2000年以降拡大している集住地域における支援について概観した。そのグループとは在日コリアン高齢者、高齢中国帰国者、在日ブラジル人、在日フィリピン人の4つである。

文献レビューから、在日コリアンや中国帰国者だけでなくニューカマーの集住地域でもケアサービスや情報の提供ができるネットワークが形成されていることが明らかになった。今後増加すると予測されるニューカマーの高齢化を理解するには、事例研究や定量調査を行わない支援の模索と当事者たちに寄り添った支援団体の形成が必要となると牧田は述べる。個々のニーズに合った言語と文化を尊重したケア提供とそれができる地域のケア資源が必要になってくる。現在、多文化の背景を持つ住民たちは福祉サービスの受給者だけでなく文化に特

色のあるケアサービスを提供する活動的なエージェントになっている。それを支えるのは日本で育った二世三世が多く、親世代のアイデンティティーを理解したコミュニティでのケアの場所を作り上げ、当事者ならではのケア資源を提供している。残された課題は当事者団体や多文化支援の資源が少ない地域での支援である。そのような支援の欠如は多文化の背景のある高齢者の孤立の可能性、もしくは家族によるインフォーマルケアへの依存が強まることが予測できる。牧田は実践的支援へとライフストーリー・インタビューを活用した質的調査を支援に活用することを提言する。それは、支援者がケア利用者の文化に関する認識と気づきを持つことにつながり、支援者たちが利用者の選択してきた道のりと彼らの暮らし方に共感し文化を尊重したその人らしい暮らしの支援を提供することに繋がる。

- (2) 牧田は移民政策学会で「高齢移民の語る暮らしとエイジング」と題して3人の中国帰国者の語りから、彼らが日本でどのように地域の社会的資源を活用しながら、エイジングを生活しているのかを明らかにし、地域での彼らの役割について提示した。3名は、中高年齢期に日本に移住(帰国)し、苦い経験と定年後の不安定な経済問題を抱えている。しかし、彼らは地域の多様な支援資源を活用し、楽しみや生きがいを見出していることを明らかにした。また、彼らは中国帰国者として支援を受ける側であったが、現在は中国から移住してきた人たちや隣人を支援する側となっていることから、グローバル化が彼らにポジティブで新しい役割をもたらしていると指摘する。高齢者は一つの年齢グループとして括られることが多い。しかし、高齢移民の語りから、彼らをひとまとまりの「弱い人」たちとして見るのではなく、違う文化と役割を持ちながら地域で生きる高齢者として認識する必要があること、高齢者の健康年齢は伸びており、身体的そして文化的にも高齢者は多様化していることを牧田は指摘し、高齢移民を「他者化」し、「弱い人」、「特別なニーズ」が必要な人というカテゴリーに入れることに疑問を呈した。また、2022年7月17日に開催されたThe Association for Anthropology, Gerontology, and Life Course学会(AAGE)にて、「Ageing War Orphans」として中国帰国者の一人の語りを中心に、日本での老いを積極的に生きる事例を報告した。これまでに海外では報告されてこなかった中国帰国者の老いと当事者による暮らしのネットワークの形成というアクティブな老いの経緯の事例と共に、コミュニティにおける多文化の背景を持つ人々による活動の場の必要性を提言した。
- (3) 河本(2021)は、高齢中国帰国者の生活支援ニーズをソーシャル・キャピタル(社会関係資本、以下、SC)の観点から明らかにし、橋渡し型SCを作り出すこと、作り直すことの必要性を指摘した。先行研究では、言語の壁が低いほど異なるエスニック間でのSC形成の機会が増え(Thuesen 2016)、同一エスニシティのネットワークはホスト国でのSC構築上重要な役割を果たすが、すべてのネットワークが移住後のSC形成に帰庫するわけでは偶発的である(KIM 2013)ことが指摘されている。本研究では、日本人の両親のもとに生まれ、戦後の混乱のため中国人養父母により養育され、中国の言語・文化を身に着けた中国帰国者が永住帰国したのち、かれらのSCはどのように変化したか、厚生労働省の中国帰国者調査結果から約15年間の変化を見ている。続いて、SCと幸福度について研究者が参画した別の調査結果から検討を加えた。
- 厚生労働省の調査では、約15年間で近隣との付き合いが減少し、交流する人数は少なくなり、相談相手は親族が中心となった。先行研究では、ホスト社会の言語でコミュニケーションできることがSC構築に役立つとしている。中国帰国者は帰国後経過年数が長くなるにつれて「日本語を不自由なく理解できる」割合が増加しているが、相談相手は自立指導員等、都道府県庁・市区町村役場職員・中国帰国者の割合が減り、配偶者と回答した者、福祉事務所職員との回答も減少した。高齢中国帰国者は子・配偶者・親戚と言う親族ネットワークの中で(悩みを)相談し、専門職や言語の壁をサポートし永住を支援するひとびとに相談する者が限られていることが明らかになった。換言すれば、中国帰国者のSCは橋渡し型が減少し結束型が相対的に大きな地位を占める。
- 研究者が参画した別の調査結果から「暮らし向き」と「現在の生活の幸福度」をみると、先行研究での議論とは異なる結果が現れた。先行研究では収入の高さが暮らし向き意識を規定する(白波瀬・竹内 2009)との議論がある。一方、調査に回答した中国帰国者は81%が日本の高齢者世帯の平均年金額より低い収入であるのに76%が暮らし向きを「普通」と、66%が現在の生活を「幸福」と回答し、事前の予想と異なる結果となった。回答に関する語りでは最低限の生活を維持できることがその判断の理由と推察される。幸福度について「非常に幸福」とした者現在の生活水準を日本社会の中で相対的に比較するのではなく、永住帰国前後の生活を比較した者がおり、これは高齢中国帰国者がホスト社会に自分を位置づけできていないことを示す。このような相対的に少ないSCと低いレベルでの満足は、当事者が「普通」とみなしていたとしても「その人らしい」暮らしを自発的に選択した結果とはいえない。むしろSCの貧困により孤立に近い状態にあることを意味する。中国帰国者は永住帰国によりSCの再構築を余儀なくされ、高齢期を迎えてそのSCは乏しくなってくる。老後の孤独・孤立を提言し、生活上の支援を得るため、すでにある結束型SCに加えて橋渡し型SCを作り出すこと、作りなおし、彼らを日本社会に位置付け孤立を防ぐ支援が必要である。

(4) 牧田は移民政策学会で発表を行い(2023年12月16日) ハワイ州に暮らす新1世女性を対象に、異文化の中でどのように適応しながら暮らし、どこで老いを迎えようとしているのか、そして医療やケアにどう対処しているのか状況を明らかにした。2023年3月と8月に合計22日間、ハワイ州でのインタビュー調査と参与観察データをもとにし、今後暮らす場所については、移住先で高齢期を迎える、リターンマイグレーション、国際定年移住の3つに分類した。70歳以上の対象者は、「日本の家族も高齢になり、頼るところがない」と、日本の選択肢がないようであった。配偶者の国籍の違いは定住先の選択に影響せず、むしろ、ハワイ(もしくは本土)に頼りにできる成人の子どもたちがいることが、ハワイに定住することの要因となっていた。医療やケアの場面では、子どもたちに相談、通訳をしてもらいながら乗り越えている。結婚によって移住し、高齢期を迎えた女性たちは、違う言語、社会制度、文化の中で、不安や変化に対処しながら暮らし、彼女たちの半数以上の21人がそのままハワイで暮らすと決めていた。その多くがハワイにある日系人・日本人ネットワークを通して仕事あるいは趣味サークルなどの活動に参加していた。心配要素である医療やケアに関しては、子ども世代の助けが鍵となっていた。インタビューでは「日系人と関わりがない」と語った人が数人いたが、彼女たちは日系人がハワイで長年形成してきたコミュニティの繋がりを活用していることが明らかになった。調査対象者は寺、日系コミュニティセンター、日本人サークルを通して集めたため、日系人の社会ネットワークから漏れた高齢新1世女性についての実情については、今後の課題となる。

(5) 河本はハワイ在住新一世女性の自営ビジネスをテーマに移民政策学会で口頭発表を行った(2023年12月16日)。本研究は、ハワイの新一世女性がどのようにして自営、起業し、どのようにして事業を継続したかを4人の高齢新一世女性へのインタビュー調査を通じて明らかにする。日本人女性新一世の研究は主婦を対象としたものが多いが、ビジネス、起業に従事した女性の語りはほとんど行われていない。ライフコースの多様性を知るうえで主婦以外の生活を経験した女性の語りは新たな知見をもたらす可能性がある。ハワイの日系宗教団体、日本人団体、コミュニティセンターを通じて調査協力者を得た。インタビューは調査協力者の指定する場所で開催し、ハワイに来た経緯、ハワイでの生活、自営、独立契約業者になった経緯、高齢期の生活について半構造化インタビューを行った。調査は2023年3月および8月に行った。4人は1970年代から80年代にハワイに移住したがその経緯は異なり、今回調査でMoore and Buttnerの指摘した生存のプレッシャーに該当する例はあったが、前職での落胆、失業といった例は見られなかった。一方、自己実現や高い所得のために起業した事例があった。4人とも日本、日本人・日系人を顧客としてビジネスを始め、起業にはエスニックな関係がキーとなっている。また、調査対象がビジネスを始めた前後に日本はバブル経済期を迎えて海外旅行や海外での不動産購入、国内での輸入品購入も容易になっており、出身国の経済状況もビジネス開始や継続の要因であることが明らかになった。本研究では起業した新一世を調査対象にしたが、雇用労働に従事する女性の経験は異なり、それが高齢期に至るまでの種々のライフコース上の決定に影響を与えらると思われる。さまざまな職種で働いた人の経験は今後の課題となる。

(6) 研究期間を通じて、研究成果の社会への還元として、以下の共催事業を行った。

2019年

多文化共生講座「満州移住者と中国帰国者の高齢化報告会」

福山市(北部生涯学習センター)と共催した(2019年11月10日、北部生涯学習センター)。河本、牧田ともに報告を行い、地域の支援者とともにこれまでの研究成果を支援者及び市民に研究成果を還元した。報告テーマは「中国帰国者のライフコース：高齢期を日本で迎えることについて(牧田幸文)」、「高齢期を迎えた中国帰国者の生活：調査結果からうかがえること(河本尚枝)」である。

第11回中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展

「中国残留日本人の体験を聞く会」実行委員会、中国・四国中国帰国者支援・交流センターと共催した(2020年11月23日)。河本が講演を行った。講演題目「広島から満州へ移民した人々の歴史」

2020年

第3回 びんご多文化共生連続ワークショップ

「多文化の背景を持つ高齢者への支援とは～京都市と広島市の事例に学ぶ～」と題して、びんご多文化共生研究会・福山市立大学教育研究交流センターと共催した(2020年12月6日、オンラインで開催)。牧田がファシリテートした。牧田による高齢移民の現状報告、NPO法人京都コリアン生活センターエルファ事務局長、トラパンダ居宅介護支援事業所所長・ケアマネジャーから支援の現場で得られた知見を共有した。

2021年

第12回中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展

中国帰国者支援交流センター、日本中国友好協会広島支部と共催した(2021年7月25日、

- 広島県安芸高田市)。河本が講演を行った。講演題目「広島から満州へ移民した人々の歴史」
- 第13回中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展
中国帰国者支援交流センター、日本中国友好協会広島支部と共催した(2021年11月23日、広島市)。河本が「中国帰国者の高齢期の生活課題および支援ニーズ」と題する講演を行った。
- 第15回びんご多文化共生連続ワークショップ「外国人高齢者の支援と地域コミュニティについて考える」
びんご多文化共生研究会、福山市立大学教育研究交流センター、びんご日本語多言語サポートセンター「びんど」と共催した。

2022年

- 2022年7月23日、福山市立大学で第16回びんご多文化共生連続ワークショップ「異文化ケアと地域コミュニティについて考える～誰一人取り残さない地域の構築を目指して～」をびんご多文化共生研究会、福山市立大学教育研究交流センター、びんご日本語多言語サポートセンター「びんど」と共催(https://www.fcu.ac.jp/news/2022/06/16_1.html)。
- 第14回中国帰国者の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展～地域共生社会の実現のために～(2022年9月11日、広島市南区民文化センター)河本が講演。講演題目「日本人の中国残留と永住帰国後の生きづらさ」
- 第15回中国帰国者の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展～地域共生社会の実現のために～(2023年2月23日、東広島市市民文化センター)河本が講演。講演題目「日本人の中国残留と永住帰国後の生きづらさ」

2023年

- 第16回中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展～地域共生社会の実現のために～(2023年7月1日、高知市立中央公会館)河本が講演を行った。講演題目「日本人の中国残留と永住帰国後の生きづらさ」
- ふくやま・まちづくり大学～共生社会って?誰もが暮らしやすいまちづくりにむけて、私たちができること～(2023年9月16日、北部市民センター)牧田が講演を行った。講演題目「地域における福祉と多文化共生～ご近所付き合いの延長として考える～」
- 多文化共生連続講座「中国帰国者の歴史から満州経験者の高齢化問題を考える(報告会)」(2023年12月24日、福山市服部交流館)、講演題目「満州経験者の高齢化と地域ケアについて」(牧田)、「満州開拓から永住帰国～現在の状況」(河本)
- 第17回中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展～地域共生社会の実現のために～(2024年1月28日、福山市新市交流館)河本が講演を行った。講演題目「中国残留日本人の遅れた永住帰国」

今回の研究期間はコロナ禍が含まれ調査対象者が想定よりも少なくなったものの、研究期間を通じて日本人高齢移民の多様な生活体験の語りからその人らしい暮らし実現のために採用したストラテジー、高齢期の生活における生きがいや不安を聞き取った。言語から生じる諸問題に不安を抱え、帰国を考えるリターン・マイグレーションに言及した人がいた一方、子ども世代の協力やテクノロジーを駆使して問題解決する人も見られた。基礎研究として一定の成果を上げられたが、その人らしい暮らしを実現するために日本人高齢移民が採用するストラテジー、リターン・マイグレーションする人々についての研究は限られるため今後はこれらも含めて研究課題としたい。

特に中国帰国者については先行研究と異なる新たな知見を得て支援者への実践的提言を行うことができた。台湾居住者、米国居住者については日本への帰国(リターンマイグレーション)という研究当初想定していなかった語りがあった。

日本人移民のリターン・マイグレーションについてはこれまでほとんど研究されていないことから、今後は「その人らしい暮らし」としてリターン・マイグレーションを考える人々も含め、範囲を拡大して研究を継続することで知見を蓄積し、介護・福祉の専門職への実践的知見の提供につなげていきたい。

- (1) 牧田幸文「多文化の背景を持つ住民の高齢化と支援」都市経営第13巻、2020年、p107-121
- (2) 牧田幸文「高齢移民の語る暮らしとエイジング」移民政策学会(2021年5月30日)
- (3) 河本尚枝「高齢中国帰国者の生活支援ニーズ ソーシャル・キャピタルの観点から」2022年、p95-107
- (4) 牧田幸文「ハワイ高齢新1世の定住先～結婚移住した女性たちに着目して～」移民政策学会(2022年12月16日)
- (5) 河本尚枝「ハワイ新一世女性の自営ビジネス 4人の語りから」移民政策学会(2022年12月16日)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 河本 尚枝 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 高齢中国帰国者の生活支援ニーズ：ソーシャル・キャピタルの観点から | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究 | 6. 最初と最後の頁 95～107 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52030 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 牧田幸文、他 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 福山市立大学びんご多文化共生連続ワークショップの軌跡と将来への展望 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 都市経営 | 6. 最初と最後の頁 261-278 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 牧田幸文 | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 多文化の背景をもつ住民の高齢化と支援 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 都市経営 | 6. 最初と最後の頁 107-121 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15096/UrbanManagement.1308 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yukifumi Makita |
| 2. 発表標題 Aging War Orphan in Japan |
| 3. 学会等名 Association for Anthropology, Gerontology, and the Life Course（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 牧田幸文 |
| 2. 発表標題 高齢移民の語る暮らしとエイジング |
| 3. 学会等名 移民政策学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 牧田幸文 |
| 2. 発表標題 A県在住高齢中国帰国者の生活実態調査から～多文化の背景を持つ高齢者への地域支援の構築をめざして～ |
| 3. 学会等名 日本地域福祉学会第33回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 牧田幸文 |
| 2. 発表標題 ハワイ高齢新1世の定住先～結婚移住した女性たちに着目して～ |
| 3. 学会等名 移民政策学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 河本尚枝 |
| 2. 発表標題 ハワイ新一世女性の自営ビジネス～4人の語りから～ |
| 3. 学会等名 移民政策学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 世羅郡文化財協会満州世羅金馬二世の会編著 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 世羅郡文化財協会 | 5. 総ページ数 100 |
| 3. 書名 「満州開拓あの時」証言集 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| <p>研究期間中の共催事業 多文化共生講座「満州移住者と中国帰国者の高齢化報告会」福山市（北部生涯学習センター）と共催し河本、牧田が報告した（2019年11月10日、北部生涯学習センター）。報告テーマ「中国帰国者のライフコース：高齢期を日本で迎えることについて（牧田）」、「高齢期を迎えた中国帰国者の生活：調査結果からうかがえること（河本）」。</p> <p>第3回 びんご多文化共生連続ワークショップ「多文化の背景を持つ高齢者への支援とは～京都市と広島市の事例に学ぶ～」。びんご多文化共生研究会・福山市立大学教育研究交流センターと共催した（2020年12月6日、オンライン開催）。牧田がファシリテートした。</p> <p>第15回びんご多文化共生連続ワークショップ「外国人高齢者の支援と地域コミュニティについて考える」びんご多文化共生研究会、福山市立大学教育研究交流センター、びんご日本語多言語サポートセンター「びんど」と共催した。</p> <p>第16回びんご多文化共生連続ワークショップ「異文化ケアと地域コミュニティについて考える 誰一人取り残さない地域の構築を目指して」をびんご多文化共生研究会、福山市立大学教育研究交流センター、びんご日本語多言語サポートセンター「びんど」と共催した（2022年7月23日、福山市立大学）。</p> <p>ふくやま・まちづくり大学 共生社会って？誰もが暮らしやすいまちづくりにむけて、私たちができること（2023年9月16日、北部市民センター）、牧田が講演した。講演題目「地域における福祉と多文化共生 近所付き合いの延長として考える」。</p> <p>多文化共生連続講座「中国帰国者の歴史から満州経験者の高齢化問題を考える（報告会）」（2023年12月24日、福山市服部交流館）」、講演題目「満州経験者の高齢化と地域ケアについて」（牧田）、「満州開拓から永住帰国 現在の状況」（河本）。</p> <p>研究期間中に中国残留日本人の体験を聞く会実行委員会、中国・四国中国帰国者支援・交流センターと中国残留日本人の体験を聞く会 満洲移民の写真・パネル展を7回共催し、いずれも河本が講演した。（2020年11月23日広島市、2021年7月25日広島県安芸高田市、2021年11月23日広島市、2022年9月11日広島市南区民文化センター、2023年2月23日東広島市市民文化センター、2023年7月1日高知市立中央公会館、2024年1月28日、福山市新市交流館）</p> |
|---|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 牧田 幸文 (Makita Yukifumi) (00555336) | 福山市立大学・都市経営学部・教授 (25407) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|